



どうなる？ 新しい社会科 —— 地図帳・地球儀を中心に ——

愛知教育大学人文社会科学系教授 寺本 潔

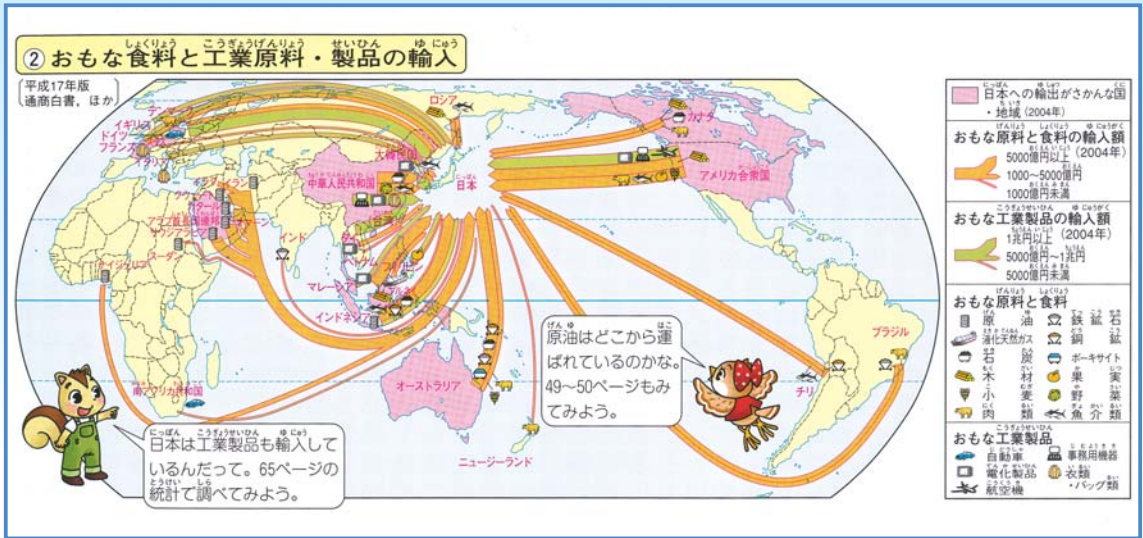
現在、検討が進められている小学校学習指導要領の改訂作業において、中教審教育課程部会から「中間まとめ」も出され、しだいに改善の方向性が明らかとなりつつある。その中で社会科では地図帳や地球儀の取扱いがクローズアップされている。新しい社会科がどうなるのか、私見ではあるが考えてみたい。

● 国土や主な外国についての 基礎的知識 ●

現行の小学校社会科が陥っている課題の一つとして、国土や世界に関する基礎的知識が不足しているという指摘がなされている。47都道府県の名称と位置に関する知識、主な外国の国名と位置に関する知識、地球儀の使用などを始めとして、日本や世界の地理的な概要を学ぶ機会が社会科の学習内容で著しく不足していると指摘されている。例えば小学校3・4年の内容に「地域の人々の生産や販売に見られる仕事の特徴及び国内の他地域や外国とのかかわり」を扱うようにはなっているが、外国とのかかわりはいかにも付け足しの感が強い。当然、「物を売る仕事」でスーパーマーケットを見学した場合、実際の授業では「商品はどこから運ばれてきていますか？」

よりも「お店で働く人はどのような売り方の工夫や努力をしていますか？」の方がキー発問となり学習問題が組まれることになる。したがって、売り方の工夫や努力（具体的には店内の商品の新鮮さや品揃え、販売方法などへの着目）について児童は思考し発言もそこに終始する。反面、外国産の商品が多く売られている事実には、授業の重点が置かれずに済ませがちになる。問題解決学習を基軸にしている社会科では、児童の多くが着目しない、つまり「問い」を持たない内容に無理やり気づかせる指導を避ける傾向にあるため、外国産の商品がいかにも食卓にのぼっているか、商品の生産地については授業で扱わないまま終わってしまうことになる。仮に、教科書に食品の輸入元が示された図が載せられていても世界地図上でその輸入元を調べるまでは至っていない（一因として3年に地図帳が配布されていない現状もある）。

さらに4年に多くは位置づけられている「わたしたちの（都道府）県」の学習でも、自県の形や自県の地形や都市などの様子は扱っても県が日本全国の中のどこに位置しているか、県の周りにはどんな府県が隣接しているかはほとんど触れないままになっている。



『楽しく学ぶ小学生の地図帳 (初訂版)』 p.61②

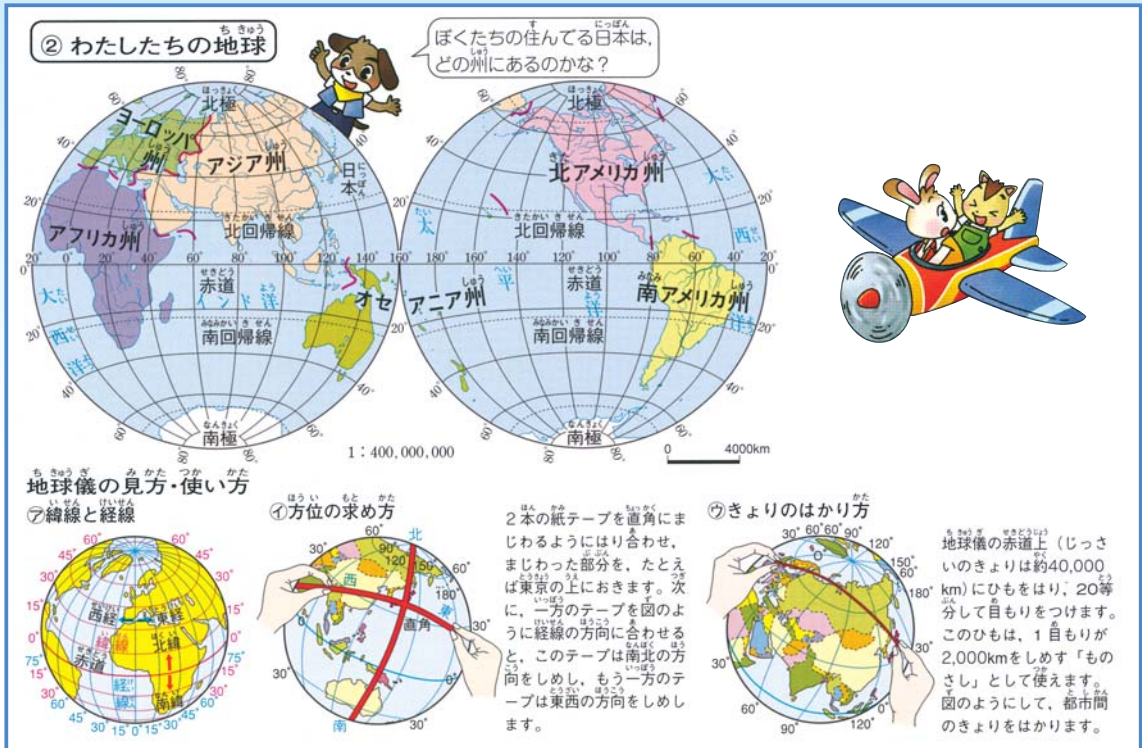
ひどい場合は、自県の周りが白抜きになっている地図をある社会科副読本で見たことがある。さらに5年に位置づけられている国土の様子の学習場面においても日本列島の形や地形、気候の様子を扱ってはいるものの、世界地図の中で日本列島の位置や形状が他国と比べて特異（大陸でなく弧状列島で南北に長く連なり位置している）である点には全く触れられないままになっている。日本が四つの大きな島で成り立っていること、最北の島の名前で「北海道」を回答する設問の正答率がわずか48.4%であった学力調査（平成15年度教育課程実施状況調査）の結果も驚く事実であるが、極めて基礎的な知識の定着も悪い結果が地図帳重視の背景にある。また国土の位置に関しては、緯度と経度で位置を示すこともできると『解説』には記されているものの、小学校段階での地球儀使用の不振も相俟って経緯線を指導する機会が著しく少ない。世界地図や地球儀を使って本格的に主な外国を学ぶのは6年の3学期「世界の中の日本」まで

待たねばならないのである。欧米などの社会科関係教科のカリキュラムと比較しても、日本の社会科は最も遅い年齢で外国を扱う状態に陥っている。

●子どもの外国理解能力●

ところで、現行の社会科が誕生した前回の改訂では同時に総合的な学習の時間も誕生し、社会科で不足する外国についての学習は、総合的な学習の時間で実施される外国語会話や国際理解を扱う際に補充されるとの甘い見方が一部にあったかもしれない。しかし、現実には、児童の外国に関する基礎的な知識は十分に教えられることがなく、不十分なまま推移してきたといえよう。

これを受けて改善の方向性として「中間まとめ」においては「広い視野から地域社会や我が国の国土に対する理解を一層深め、日本人としての自覚をもって国際社会で主体的に生きていくための基盤となる知識や技能を身



『楽しく学ぶ小学生の地図帳（初訂版）』 p.48

に付けることを重視して改善を図る。例えば、地図帳や地球儀の活用を一層重視する。（中略）世界の主な大陸や海洋、主な国の名称と位置などを調べる学習を新たに加え」が入った。つまり、「広い視野」がキーワードとなったのである。自国の地理的位置が曖昧なままで自国理解が進まない。世界の中で適切に位置づけてこそ自国がわかるというものである。

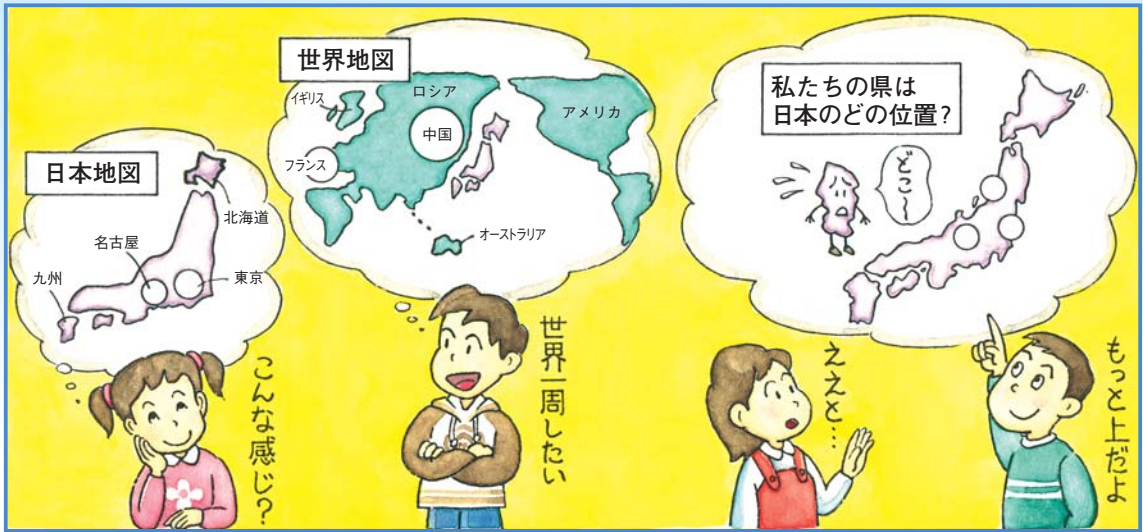
では、具体的にはどのような指導が望まれるのであろうか？ 地図帳や地球儀をどのように使えばいいのであろうか。

● **地図帳・地球儀による「位置の認知地図化」** ●

人間は一般に自分勝手な認知地図を頭の中

に形成しているものである。他県や他国についても知っている国は比較的はっきり位置も合わせて思い浮かべることができるが、あまり知らない国に関してはぼんやりしたイメージで捉えたり、他県や他国と取り違えたり、誤った知識で理解していたりする。地図帳で知っている県や国を調べたり、行った経験を確かめたりすることで、大人である私たちも何度も「ああ、この県の形はこうだったのか」「あの国はココにあったのか」とつぶやいてきたのではないだろうか。それほど認知地図は曖昧なのである。

それでは地図帳や地球儀による「位置の認知地図化」を図るには、どうしたらいいのだろうか。筆者は次の三つの指導過程を経ることが大事であると考えている。その三つとは、



①さす ②なぞる ③つくる、の三つである。「①さす」指導とは、地図のある地点を人差し指で指すことから始め、指先に見える地名や土地利用の色、地形の様子、都市や交通網、産業記号、歴史地名などを頭の地図の中に「指し示し位置づけながら」記憶させることである。このとき、言葉を発すると記憶しやすくなる。例えば「庄内平野を見つけました。最上川が流れていて周りは水田や畑が広がっています。その周りには山地が取り囲んでいます。」という具合に「さす」プラス「発見言葉」をどんどん表現させることが効果的である。

次に、「②なぞる」指導に移行させる。指で市街地の広がり（外周）や海岸線、鉄道、高速道路などの境界や交通路に相当するラインを「なぞる」のである。この後で鉛筆を持ちラインを写し取る作業がさらに効果的である。略地図を描かせる指導などその代表である。地図帳では、薄めのトレーシングペーパーを配布して、ラインを写しとらせる方法もいい。鉛筆がなぞる線を見つめる目と手の動

作との協応関係が形成されて一層、認知地図として記憶しやすくなるからである。最後に「③つくる」指導がある。これは印刷された白地図に調べた内容ごとに着色して地形段彩や土地利用図を完成させたり、地図帳から地名や産物記号を抜き出してオリジナルのテーマ地図（例えば、自動車工場🚗と製鉄所🏭の記号を貼り付けた日本全図）を作図したり、地球儀模型を制作する作業学習（描図や作図、製作）などが「つくる」指導に入る。要は、地図帳や地球儀を使って学習させる機会に位置に関する内容を何度も児童の頭の地図に認知させ、曖昧に記憶していた県や国の位置と名称をより正しい姿に近づけさせる教師の出方が重要になってくる。

小学校社会科では習得、活用、探究の各場面において地図帳と地球儀が一層重要視されてくるだろう。早急に簡便な指導法を開発しなくてはならない。

参考文献) 寺本 潔 編著 『プロが教えるオモシロ地図授業』 2007 明治図書 134ページ